変愛小説～私の彼氏は変人ばっかり～

夜那國

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
変愛小説～私の彼氏は変人ばっかり～

【Ｎコード】
Ｎ１２６９Ｗ

【作者名】
夜那國

【あらすじ】
私、西倉乱世（通称：クララ）は、名前が変な高校一年生。恋する乙女です、てへっ。そういう私は自分で言うのも何だけど、もてる。でも、変人。でも、そんな彼が好きなの！　私の恋愛はどうなるの？　失恋したらインスピレーションが！　恋と失恋で新しい小説が生まれる！

登場人物

・【西倉　乱世】≪にしくら　らんせ≫
小説を書くのが趣味。小説サイトに投稿している。ペンネームは西周　司≪にしあまね　つかさ≫。
最近の悩みは、好きになってしまうのが変人ばかりだという事。

・【品定　弓月】≪しなさだめ　ゆづき≫
名前が変だと言う事で乱世と喧嘩になり、それが切っ掛けで友達になった。
最近の悩みは、ツインテール以外、自分に合う髪型が無いこと。

・【鳴子　鈴】
通称：なるりん。乱世の中学からの友達。温かい目で乱世を見守る。
最近の悩みは、乱世には変人でも彼氏が出来るのに、自分には一人も出来ないこと。

第一話　変愛小説家

私には不満がある。名前がハズレだ。何で、自分で名前を選べないのだろうか？　両親、少し冷静になって考えて欲しい。一生使うものだよ？　これで、印象が決まるんだよ？　何故こんな名前にした！

西倉　乱世

さぁ、何て読むでしょう？　それ自体は簡単だ。にしくら　らんせ。それ以上でもそれ以下でもない。乱世なんて、人の名前じゃないよ！　おかしいよ！

さて、こんな私には趣味がある。小説を書くことだ。小説は良い。自分で名前を付けれらる。ペンネームも自分で付けられる。

さて、今日も書きましょうかねぇ「〇〇小説」を。

ペンネーム：西周　司

乱世の友人の品定弓月（しなさだめゆずき）がパソコンに向かっている。名前の事で口論になり、弓月が勝利した。

「結婚すれば、この変な名字とはおさらば出来る。よって、私の勝利だ」

「がーーーーん」

瞬殺だった。

最近、ある程度親しくなり乱世はついに自分の小説を弓月に紹介した。小説サイトに投稿されている。弓月は「自分のＨＰ作れ」と言ったが、「今度ね」と流した。

「クララの奴……小説書いてるって聞いたけど……。……にし……何て読むんだ？　えっと、手書きツールで、検索っと……ふむふむ、これで「にしあまね」か。普通、読めん。検索するとき「にしまわり」って打ったぞ！　にしあまねつかさ、か。さて、どんな小説を書いてるのだろうか……」

カチ（クリックの音）

「ふむふむ、恋愛小説か。嫌いなジャンルじゃない。むしろ万人受けするだろう……。よし、短編ものだし読んでみるか」

―数分後―

「……変だ」

弓月は口走る。誰もいない部屋で。

「変だ！」

弓月は叫ぶ。誰もいない部屋で。

「変だ！！」

弓月はさらに叫ぶ、部屋に弟が入ってきても。

「これ、恋愛小説じゃない！　確かに恋愛だが、全体的に、変だ！変愛小説だ！」

残念ながら、少し「面白い」と思ってしまった。

～学校～

「クララ、あの小説は何だ！」

弓月は学校で叫ぶ。昨日、家で叫びすぎたせいで、声が若干かすれていた。

「あれ？　読んでくれたの？」
「ああ、読んださ、面白かったさ。でもな！　あれは恋愛小説なのか？　変だぞ！　絶対に！」
「……ごめん、泣い……トイレ行って来る」
完全に泣いて来ると言っていた。
乱世がトイレに行く。
ちなみに、「クララ」というのは、クラスの女子が結束し、西倉乱世に可愛い名前を付けようとして名付けられた名前である。「にし『くらら』んせ」→『クララ』。こういう事である。
「あーあ、泣かせた」
「私が何かしたか？」
乱世の中学の頃の友人の鳴子鈴（なるこりん）、通称：なるりんが弓月に話しかける。
「あの小説はね、ほとんど実話」
「ハッハッハハッハ。まっさかぁ～あんな変な恋愛あってたまるか」
「乱世はもてる」
「ああ、まぁ、可愛いしな。おっぱいも大きいし」
「いや、そういう事じゃなくて……その、あのね……」
凄く言いにくそうに口を開いた。
「乱世は『変な人』にもてる」
「ほうほう」
「その上、乱世はほれる」
「ほうほう……いや、そこは肯定出来ない。意味がわからない」
「乱世の小説は挫折、屈折、敗北で出来ている」
「暗いな、泣けてきた」
「正確なサイクルはスランプ→恋→失恋→執筆だけど」
「……最近更新が止まっているって事は……」
「スランプ……もう少しで、恋が始まる」
「”恋”が”変”なんだな」
「……まぁ、否定はしない。だから、気遣ってあげて、乱世の小説

は失恋実録だから。決してけなさないであげて」
「そういう事情なら……」
弓月は微妙な心境に陥りながらも、納得し、約束した。
「なるりん、弓月！　新しい彼氏出来た！」
新しい変愛小説の幕開が開ける。

第一話　変愛小説家（後書き）

息抜きに書いたものです。クスッっと笑ってくれるとありがたいです。文字数は毎回少ない上に、不定期更新です。気が向いたら書くという感じです。よろしくお願いします。

第二話　男の娘

「さぁ、吐け！」
「乱世、今度は誰？」
「なるりん、まず、その”今度”ってのやめてくれない？」
乱世は頬を膨らせ怒りをあらわにする。本人にも自覚があるからこそ、気に障る様だった。
「まだ、時間はあるな。今の時間が８：１０分。まだＨＲまで２０分はある！」
時間を確認。まだ、問いただす程度の時間は残っている。
「乱世、どうやったら朝、トイレ行くだけの間に彼氏が出来るの！」
乱世を知っているクラスの生徒は、

『今度はどんな奴だろうな？』
『小説楽しみ～』
『トイレ行って彼氏……アッ――――――』

等と呟いていた。
「えっと、ハンカチ落として、拾って貰って、お礼言ったら告白された」
「えっと……ごめん、ついて行けない。なるりん、パス」
「何そのキラーパス？　……ハンカチ拾って貰って、　お礼言ったら彼氏が出来るの？」
「出来た」
「おかしくない？」
「いや、事実だから。仕方ないから！」
「クララ、相手誰？」
「来馬雷花君（くるまらいか）」
「……名前凄いな」

「金持ちの双子だよ。来馬財閥って知ってる？」
「聞いた事はある……で、このまま上手くいけば玉の輿か」
弓月は羨望の眼差しを乱世に向ける。玉の輿。軽く女子の夢です、はい。
夢に浸っている弓月に「……弓月、トイレに行こう」と鈴は切り出す。
「あ、ああ」
二人は教室から出て行く。
教室からある程度離れ、鈴は足を止めた。
「二週間……」
「二週間？」
「乱世に彼氏が出来てから別れるまでの平均期間」
「二週間……だとっ！　……短いのか？　長いのか？」
微妙な期間だった。
「そう、だから私達は出来るだけ長く続くように動くの」
「どうして、そんな変な事をしなきゃならんのだ？」
「……逆のパターンがあるの」
「逆？」
鈴は深刻そうな顔をして続ける。
「乱世を好きになってから変人になる場合が」
「何でだよ！」
変人じゃない人間が変人になるという現象は弓月にとって理解不明だった。
「乱世の歴代の彼氏は変人だった」
「ああ、それは聞いた」
「逆説だけど、乱世の彼氏になるためには変人になれば良い」
「まぁ、そうだな」
「乱世は可愛い」
「おっぱい大きい」
「普通の人間から見ても乱世は可愛い」

「普通の人間から見ても乱世はおっぱい大きい」
「だから、乱世に合わせて変人になる男子が現れる」
「だから、乱世に合わせておっぱいが大きい男子が現れる」
「……途中からおかしい事になってるから、それ。どんだけ胸に執着持ってるのよ」
「……ないものねだりだ」
鈴は弓月の胸を見て、
「何か、ごめん」
謝罪の言葉を述べた。
「で、何で長続きさせなきゃならんのだ？」
「乱世のもて力を舐めない方が良い」
「もて力って何だ？」
「今まで付き合ってた男子の数」
弓月は自分の指を折り数える。
「まぁ、多くても五人くらいだろ？」
「およそ、３００人」
「はっ？」
壮大な委員会と同じ数だった。
「今まで乱世が付き合ってきた男子の数。乱世は３０人って答えたから多分３００人」
「……３０人って時点でにわかに信じがたい」
「だからよ」
「すまん、飛躍し過ぎてわからん。三行で頼む」
「男子が乱世に惚れる
男子が変人になる
学校から普通の男子が消える」
「……やばくね？」
仮に３００人として、３００人の中の２００人が最初から変人だったとする。残り１００人は乱世のせいで変人になった事になる。
「弓月、折角の高校生活、彼氏の一人くらい欲しいと思わない？」

「まぁ……な」
「乱世は可哀想な残念な子だけど、私達は彼氏の一人すらいない」
「いや……あの……その……」
「って、事で、普通男子を残すため、私達は奮闘しなきゃならないの！」
「お、おおー」
「ってことで、協力お願い」
「おーけぇ。理解。何をしろと？」
「まず、相手を調べる」
「ほぅ」
「で、嫌われないようにフォローする」
「ほうほぅ」
「以上」
「そんだけか」
「それくらいしか私達に出来ることはない。むしろそれが大変なの」
「そうだな、まぁ動くか」
「そろそろ授業も始まるし、放課後にしましょう」
「ああ」

◆

～放課後～

「さて、まずは来馬雷花君の情報を集めましょう」
乱世は雷花と一緒に下校すると言ってすぐに教室を出て行った。
二人は廊下を歩きながら相談していた。
「……ところで、どんな奴か知ってのか？」
「全くもって知らない。名前だけ知ってるって感じ」

「じゃあ、取り敢えず、クララを尾行だな」
「ばれないように会話も聞きたかったけど流石に――」
「盗聴器を仕掛けておいた」
「いろいろと突っ込みどころあるけど、そこは総スルーの方向で」
「これ、イヤホン。なるりんの分も用意しておいた」
「サンクス」
二人はイヤホンを耳にはめる。

『雷花君、今日はありがとう』
『ありがとうって何が？』
『ハンカチ拾ってくれた事』
『？　あ、ああ。うん、そうだ、うん。そうだね』

「なるりん、えらく動揺してない？」
「照れてるだけじゃないの？」

『何で私の事を好きに？』

「全身がかゆくなるリア充発言だけど……まぁ、私達に必要な情報だな」
「ええ、でもこの質問は地雷。どう返しても自爆必至。さぁ、お手並み拝見よ」

『快活で、いつも笑顔を絶やさない事、それに、奇抜な発想の小説を書ける事に感銘を受けたからかな？』

「上手い！」
「流石だ」

『西倉さんこそ、なんで私の事を？』

「おおー、下の名前で敢えて呼ばなかった」
「乱世は自分の名前を嫌ってるからね。これは高ポイント」
『いやぁ……こんな事言うのも何だけど可愛かったからかな？』
「クララ、それは男子に対して無効だ！」
『本当？』
雷花の顔が花咲くかの様な笑顔になる。
「……喜んでるよ」
「マジですか」
『うん、何か小柄で女の子みたい』
「身長はぱっと見１５０センチ前後ってところか」
「ええ、ぶっちゃけ可愛い」
『ありがとう』
「あの笑顔の破壊力はやばいな」
「ええ、不覚にも……くっ――」
『じゃあ、私はここで、残念だけど今日は用事があるから』
『うん、また明日』
「なるりん……」
「ええ……」
「可愛かったな、来馬雷花」
「圧倒的だった」

「……」
「……」
「「なんじゃそりゃ！」」
二人は叫ぶ。
今度の乱世の彼氏は男の”娘”だった。

第二話　男の娘（後書き）

うーん考え無しの小説だと後が辛いかもです

第三話　恋愛会議～来馬来夏の変～（前書き）

久しぶりの更新です。久しぶりに書いたので要所要所文章力が至らない上、誤字もあるかと思いますが、そこは寛容な心で見てやって下さい。

第三話　恋愛会議～来馬来夏の変～

・【男の娘】
女装した男子。似合う上に女子より可愛い男の事。
最近需要が高く、様々な二次創作の題材とされている。繰り返すが、特徴は女子より可愛い事。
女子は男の娘に羨望の眼差しと不思議な嫉妬を抱くという。

◆

二人は喫茶店にいた。茶でも飲まないと落ち着けなかった。
「なるりん、ショタと男の娘は両立されるのかな？」
「いやわからんけど、私、そういうのそこまで詳しくないし」
「ふむ」
弓月はアイスコーヒーにミルクを入れかき混ぜる。
「あれ、厳密には男の娘ではないと思うんだ。女装してなかったし」
「そりゃ、学校でまで女装してたらイジメられるでしょうよ」
「いや、そんな事ないだろうよ。女子が少し嫉妬するだけだと思う。今、そういう男子好きな奴も腐るほどいるし」
「……」
否定出来ない鈴がいた。
もし、雷花が女子の制服を着ていたら、素直に可愛いと思う。
あの容姿で男子の制服を着ている方が違和感があると言えた。
「そう……ね」
「う～ん、少し引っかかるな」
「何が？」
弓月は苦かったのか、アイスコーヒーにガムシロップを入れる。

「男子が可愛いと言われて嬉しいものなのか？」
「う～ん、微妙な心境になるかもしれないけど、好きな人に褒めて貰えたら素直に嬉しいんじゃないかな？」
「そうか……」
弓月は疑念の色を浮かべる。
「これからどうする？」
「思ったより上手くいきそうだ。このままいけば何の問題も無く続きそうだけど……」
「そうだな、私もそう思う、何の問題も無ければ」
念を押すように繰り返す。同時に願いでもある。――このまま続いてほしいと。
会計を済ませを店を出る。
「じゃあ、今日はこの辺で」
「そうだな。何だか疲れた」
二人はそれぞれ家に帰った。

◆

『聞いたか？　今度は男の娘だってよ！』
『クララちゃんと雷花君……ついに私の時代が来たか……！』
『雷花俺だ、結婚してくれ！』

「なぁ……」
弓月は口を開く。
「何？」
鈴は気だるそうな顔をして答える。
「うちのクラスってこんなんだったっけ？」
「さぁ？」

しかし、学校のみなが話題にするのもわからないこともない。普通に並んでいるだけで絵になる二人が付き合っているのだから。
「乱世は？」
「さっきトイレ行ってくるって言ってた」
「へぇー……また変な事起きなきゃ良いけど」
鈴の願いが叶うことはほとんどない。つまり……、

『なるりん、弓月どういうこと？』

何か必ず変な事が起きると言う事だ。
「主語述語目的語を頼む」
「えっと……」
「そうか、クララ難しかったな。じゃあ普通に答えろ」
「雷花君が女子トイレに入ってくとこ見た！」
弓月と鈴は溜め息を吐く。
「お前、知らないのか？」
「何が？」
「乱世、本当に知らないの？」
「だから何が？」
「だってさ、雷花には双子の姉の風花がいるだろ」
「ああ、何だ、双子のお姉さんか……私勘違いしてたのか……」
少しショックを受けた様な顔をし、弓月は少し後悔する。
「まぁ、双子も大変だろうな。ただでさえ間違えられるの嫌だろうし……気を付けろよ」
「はーい」
乱世は先程の弓月の後悔を返せと言わんばかりの満面の笑みを浮かべやがっていた。
「クララ、今お前幸せか？」
「えっ？　あ、うん」
「そうか……」

弓月は愁いを帯びた笑顔を浮かべ「頑張れ」と言った。
「さぁ、授業が始まるぞ」
弓月はそう言って自分の席に戻って行った。

◆

いつもの喫茶店。いつもの二人。乱世がいると話しにくい話をするときは、ここに来るのが習慣となってしまった。
弓月が苦々しい顔をしている。
「……ふざけるなよ」
弓月は殺気を込めて睨み付ける――
「いやぁ、ね……。珈琲は苦いものだろう？　甘い珈琲出せっていうのが無理難題なんだよ」
――喫茶店のマスターを。
「だから、飲みやすいカプチーノを出したんだけどねぇ」
「コーヒー牛乳とか無いのか？」
「そこまでにしなさいよ弓月。喫茶店にコーヒー牛乳とかあるわけないじゃない。ねぇ、マスター？」
「あるんだな、それが」
「マスター？」
「小腹が空いたな……。マスターたこ焼き食べたい」
「だから、ここ喫茶店――」
「五個で２８０円ね」
「おーけー」
「あるの？」
マスターが万能だった。
「――で、話って何よ、弓月」

「ああー。……うわっ！　このたこ焼きうまいっ！　生地自体に味がある。食感も良い。たこもこだわっている。かつおぶしも……マスター！　このソースは自家製だな？　軽く感動したぞ」
「ありがとうね」
珈琲が苦いと批判され、たこ焼きが旨いと言われるマスターの心境は少し複雑だった。
「弓月、帰って良い？　この後用事あるんだけど」
「ああ、すまない。あまりにたこ焼きが旨くて……」
「いいけど。ここで話って事は乱世絡みでしょ？」
「その通り」
二つ目のたこ焼きを口の中に放り込み、水を飲む。
「来馬雷花の事だ」
「……？」
鈴の疑問符は至極当然なものだった。何の問題も無く交際は進んでいる。今まで乱世を見てきた鈴の目から見てもそれは明らかだった。
「……偉いな、なるりん。今まで乱世を見守ってきた気持ちわかるよ……」
「どういう事？」
「何か……――友達が失恋する所って見たくないよな」
その目は本気の目で。嘘偽りも無かった。毒気の無い、少し寂しそうな顔をしていた。
「弓月……」
「雷花は頑張ってるよ。でも、無理なものは無理なんだ……。長くは続かない。どんなに頑張っても絶対に綻びは生まれる。乱世が変わらない限り
絶対に破局するんだ……」
「……聞かせて、その理由を」
「それはな――」
弓月の口から発せられる言葉。愕然とする鈴。

「……そんな……。その終わり方は乱世も今まで経験した事無いよ」
「あったら逆に困るわけだが……」
「どうしよ……」
「困ったよなぁ……」
「問題は、解決出来ないって事ね……」
「一応、雷花に聞いてみるか」
「そうね……。雷花に協力して貰えれば解決するかもしれないし……」
「よし、じゃあ、明日早速雷花を喫茶店に招こう」
こうして二人の乱世恋愛作戦〜雷花編〜が始まった。

第三話　恋愛会議～来馬来夏の変～（後書き）

大晦日、息抜きに受験生が書いた小説です。
余裕？　ないですね（血）

第四話　雷花の本心

少女と少女（？）。西倉乱世と来馬雷花。傍から見れば仲の良い友達にしか見えないが、二人は恋人である。
「はい、あーん」
乱世は箸で卵焼きを雷花の口に運ぶ。
「少し恥ずかしいな……」そう言うも、雷花はそれを食べた。
本来なら、昼休みの食事時間に、教室でそんな事をしてたら「教室で何イチャついてやがる」と恨みを買う事になるが、この二人にに限っては違う。
『俺……死んでも良い……』
『おれもだ……現実に理想郷を見出せた……』

『雷花くんハァハァ……雷花く……はぁ！』
『三？ぇぇぇぇぇぇぇぇ！　逝くなぁぁぁぁぁ！』
『雫の痙攣が止まらない・・・・・手遅れか？』

「……クラスが腐ってるな」
「今に始まった事じゃないけどね……」
弓月と鈴はマスターから貰った羊羹を二人で食べている。
「栗羊羹……以外といけるな。苦手だったんだがクセになりそうだ」
「お茶要る？」
「ああ、ありがたい」
茶道部から借りてきた点てた茶は、格別だった。
「なるりんや、お茶でも習ってたか？」
「家が茶屋なもんで……」
「この間の用事ってのは？」
「親が茶会に参加しろってね」
「へぇ～以外だ……」

再び茶を飲む。毒気が抜かれていくようだった。
「さて、昼休み終了まで１２分。乱世がここから離れることもない」
「そろそろ行きましょうかね」
二人は片付けを手早く済ませ教室を後にした。

◆

――放課後。喫茶店。今になって、弓月はこの店の名前を気付く。
―喫茶店　三？―。
「なるりん。このミセの名前……」
「三？の名前？　確か三？雫（みせしずく）だったはず」
「うっ……話の展開の最後持っていきやがった」
「あれ？　気付いてなかったの？　この店……、三？の親の店なのよ」
「みせみせうるさい」
弓月は注文しておいたコーヒー牛乳を口に運ぶ。
――甘い。しかし、絶妙な甘さだ。虫歯気味の歯に染みず、甘過ぎず、若干の苦み。流石喫茶店のマスターだけはある。
「マスターあなたは凄いマスターだな……」
弓月は賞賛の言葉を贈る。
「まぁ、料理は殆ど三？（娘）が作ってるみたいだけど」
「私の賞賛の言葉を返せ」
「でもマスターも作ってるからね」
「マスター、最近マスターが作った料理ってなんだ？」
「たこ焼き」
マスターはコップを洗いながら淡々と答える。
「前言撤回。凄いよ、マスター」
弓月のマスターへの評価は揺るがなかった。

「さて、そろそろ来るだろうな……」
――カランコロン。弓月の言葉に呼応するように、扉が開き扉の鈴がなる。
「いらっしゃいませ」
安住高校の制服。間違い無く来馬雷花だった。
「あんたらか？　手紙の主は」
荒々しい言葉。乱世が聞いたら驚くこと間違い無しだ。
「ええ」
「そうだ」
二人は順々に答える。
「こんなカワイイ二人に誘われてこーえーです」
眼光は鋭い。要件はわかっている。彼にとって好ましくない話がされると感じている証拠だった。
「――で、要件は？」
椅子に座り珈琲を注文する。
「エスプレッソ、ブラックで」何とも男らしかった。
弓月は少しも動じる様子もなく口火を切った。
「単刀直入に訊く。お前は……来馬雷花は西倉乱世の事が好きか？」
「ああ……」
肯定の言葉を願っていた二人は、安堵の息を漏らす。

「嫌いだ。大ッ嫌いだね」

最悪の言葉が返って来た。
「俺が愛しているのは姉貴の楓夏だけだ」
「そうか……」
鈴の目から涙が溢れる。今まで色んな乱世の失恋を見てきた。これで、確定した。乱世の失恋が。

「要件はそれだけか？」
「ああ。……いや、もう一つだけ」
「何だ？」
マスターは気不味そうに机にエスプレッソを置いた。
「どうも」と愛想良く礼を言う。どうやら、意図的に二人に敵意を向けている様だった。
「これは……お前の姉、来馬楓夏の頼みでやった事だな」
「ああ、姉貴に……風花に頼まれた事だ」
「ありがとう」
「どういたしまして」
敵意を解いて、エスプレッソを一気飲みして、来馬雷花は店を後にした。
「はぁ……。泣くなよなるりん」
「ちくしょー……殴ってやりたい……。自分の好きな姉のためにそこまでする？　普通」
「なるりんや、アイツさ、自分の姉の事を『愛してる』と言ったよ。……つまりさ……シスコンとかじゃなくて、一人の異性をして好きなんだよ……。アイツも等しく奇人変人の類だったわけだよ」
「……何で、乱世の周りにはこんなにも『普通』の人間がいないの……」
「はぁ……全くだな」
弓月は無理に笑顔を作り、鈴に言った。
「まぁ、泣くなよ、今日は飲もうぜ！　なるりん」
弓月が追加注文したコーヒー牛乳は、少し、しょっぱかった。

第四話　雷花の本心（後書き）

感想絶賛募集中です。こうした方が良いとか、何がおもしろかった、つまらなかった等どんな些細な事でも参考にしたいので、どうぞよろしくおねがいします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1269w/

変愛小説～私の彼氏は変人ばっかり～

2012年1月1日01時46分発行